(c)宮崎日日新聞社

地道な努力 地域に希望

第62回宮崎日日新聞賞

６部門に２個人４団体

各分野で優れた功績を挙げ、県民の幸福や本県の発展に寄与した団体・個人を顕彰する第62回宮崎日日新聞賞の受賞者が決まった。科学、文化、教育、産業、社会、新設したＳＤＧｓ賞の６部門で２個人４団体が受賞。それぞれの分野で地道に活動を続け、最先端の研究、長年の福祉や自然保護活動などが高く評価された。たゆまぬ努力で県民に希望を与えた受賞者・団体を紹介する。

産業賞

宮交ホールディングス株式会社　宮崎市

県民の足 100年支え続ける



宮崎交通グループ創業100年の節目に、ヤマト運輸と乗証運行を始めた路線バス型公共ライドシェア「ねこみやバス」。日向入郷地区で人と荷物を同時に運ぶ（佐藤輝彦撮影）

乗客と荷物運ぶ実証も

1926（大正15）年、箱型の自動車4台で営業を始めた宮崎交通（当時宮崎市街自動車）グループが、創立100周年の節目に宮崎日日新聞賞産業賞に輝いた。

宮交ホールディングス（HD）の渡邊俊隆社長は「ひとえに県民、株主、行政、先輩、社員、いろんな方のおかげ。みんなでいただいた賞でみんなに感謝したい」と話す。

5月の記念式典のほか、記念ラッピングバスの運行、「青バス」と呼ばれ人気だった濃紺色の特別塗装車の復刻、バス停命名権の導入などさまざまな事業を行った。渡邊社長は「グループの各事業会社、各部署それぞれに考えて100周年事業をやったことによって、社員の会社への思いやモチベーションが高まった」と手応えを語る。

今月から日向入郷地域で、乗客と宅配荷物を一緒に運ぶ「ねこみやバス」の実証運行をヤマト運輸と始めた。人口減少と担い手不足を解決する手段の一つで、「バスも付加価値を付けてやっていかねばならない」と先を見据える。（川路善彦）

教育賞

宮崎公立大人文学部准教授　山下　裕亮さん（41）宮崎市

地震研究 各地で防災情報発信



防災に関する人材育成などについて話す宮崎公立大の山下裕亮准教授

命救うため授業や講演

地震の研究を続ける傍ら、学校での授業や自治会等での講演を通じ、本県の防災意識の向上に尽力している。それは「研究だけでは命は救えない」という思いからだ。

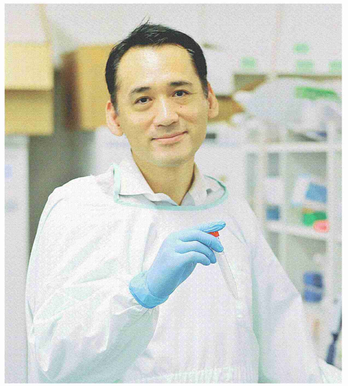
長崎市出身。鹿児島大、九州大大学院、東京大地震研究所と進み、日向灘における浅部スロー地震に関する研究は科学誌「サイエンス」に掲載された。そんな「観測屋」は2016年の熊本地震で、「被災者の『まさかこんな地震が起きるとは』という言葉に考えさせられた。接点を持たなくては」と当時所属した京都大防災研究所宮崎観測所から情報を発信、日向灘地震についての防災授業、フィールドワークなどにも取り組む。

「理学としても地震を踏まえた上でどう備えるのか、正しく理解してもらいたい」という。25年に宮崎公立大へ准教授として着任。「学生は南海トラフ地震が起きた際に社会を支える世代。考える力を身につけた人材を育成したい」と話す。（成田和実）

科学賞

宮崎大フロンティア科学総合研究センター准教授　齊藤　暁さん（43）宮崎市

あぶらとり紙でネコの病気確認



「人の役に立つ独創的な研究を形にしたい」と話す宮崎大フロンティア科学総合研究センターの齊藤暁准教授（斉藤傑一撮影）

多彩な成果 実用化目標

市販のあぶらとり紙を使ってネコの「重症熟性血小板減少症候群（SFTS）」感染を簡易する手法の考案や、ネコB型肝炎ウイルス集団感染の初確認など、ここ数年で目目を集める成果を世に送り出している。

現在取り組むのはSFTSに感染したネコの治療薬の開発。人間の薬を転用するアプローチで、候補は1種類に絞り込んだ。「実家の愛猫を助けたかったという少年時代の思いが研究者としての原点だった。ネコの病気の研究はライフワーク。集まる学生も自然にネコ好きが多い」と笑顔を見せる。

研究の幅はネコにとどまらない。人に感染すると致死性が高いニパウイルスの感染判定に用いる作業用細胞の開発、豚由来のウイルス分離作業に適した細胞の作製など、人獣にまたがってさまざまな成果を挙げた。

「宮崎大で獣医師として育ててもらった。母校での仕事を評価していただけたのはとてもうれしかったという少年時代の思いが、これからも社会に役立つ、実用化につながる研究を続けていきたい」と話した。（萱野拓郎）

大会や機関誌発行続け60周年

文化賞

宮崎県俳句協会　宮崎市



今年60周年を迎えた「県俳句協会」のメンバー。前列右から2人目が田上比呂美会長

関心増へ講師育成講座

今年60周年を迎えた県俳句協会（田上比呂美会長）＝宮崎市＝は、さまざまな経社に所属する俳人が加盟する全国でも珍しい団体だ。会員は受賞に笑顔を見せながらも、「仲間を増やす努力をしたい」と気を引き締める。

同協会は毎年、県民俳句大会を開催するほか、県俳句年鑑や機関誌「野火」（年3回）を発行。俳句に関心を持ってもらおうと、地道に努力を続けてきた。

しかし、15年前に800人いた会員は現在、290人ほどに減り、年齢層も50代から100歳超までと高齢化。この現実を受け止め、田上会長（70）は2年前の会長就任から、県内各地でイベントを実施するなど攻めの姿勢を見せる。

さらに昨年は、俳句教室などで指導する講師を育成する講座を6回実施。受講者には修了後も、小中学校で行う出前講座に参加してもらっている。

田上会長は「先人たちが育ててきた協会が100周年まで続くよう皆で頑張っていきたい」と意気込む。（永峰尊子）

ウニ食害の藻場再生

SDGs賞

平岩採介藻グループ　日向市



藻場の再生に取り組む平岩採介藻グループのメンバー

「海きれいに」漁師潜る

海底の浅瀬に海藻が密集して魚介類の棲場や産卵場となる藻場。日向市の平岩採介藻グループ（高橋和俊代表、8人）は、同市平岩沖を中心にウニ食害で激減した藻場再生に取り組んでいる。

地元の漁師らで2010年に結成。当時は温暖化による水温上昇やウニの食害による磯焼けなどで藻場が減少していた。だが、結成前も含めて約20年間にわたるグループのウニ駆除が実り、平岩港近辺の藻場はほぼ回復し、全国的にも珍しいほどの成功例となった。

普段の活動は平岩港周辺で海水の透明度の高い毎年11月から翌年2月上旬まで毎週1、2回実施。深さ3～15㍍まで素潜りし、ウニをハンマーでたたき割って処分する。潮の流れる中での作業は重労働だが、海のプロである漁師が本気で取り組むため効果も上がる。

高橋代表（80）は「メンバーの高齢化が課題。参加者を増やしていきたい。宮崎の海をきれいにしたいとの思いで誰でも始めてほしい」と話している。（佐藤輝彦）

当事者ら 手を取り合い50年

社会賞

NPO法人ASDみやざき（宮崎県自閉症協会）　宮崎市



発足から50年を迎えた「NPO法人ASDみやざき」（県自閉症協会）の役員ら（西脇真一撮影）

育ちと交流の場を提供

「NPO法人ASDみやざき」（県自閉症協会）は今年7月、前身の「宮崎市自閉症・情緒障がい児を持つ親の会」の発足から50年を迎えた。設立メンバーの竹井義信さん（87）＝宮崎市＝は受賞に対し、「頑張ってきたことを社会が認めてくれた」と喜びを語る。

自閉症という言葉がまだ社会に浸透していなかった1976（昭和51）年、親たちが手を取り合ったのが会の始まりだった。月1回の例会では、自閉症への無理解や社会の偏見に苦しんだ経験を語り合い、互いに励まし合ってきた。

2008年に県自閉症協会を設立し、24年には法人化した。これまで専門家を招いた講演会や保護者のための勉強会を開催してきたほか、芋掘りやトウモロコシ狩り、療育キャンプなどの行事を通じて、子どもたちの育ちの場と家族間の交流を生み出してきた。

児玉真弥理事長は「私たちの活動は、先輩方の涙と積み重ねられた努力が礎。その思いを次世代につなげていきたい」と決意を新たにしている。（井口健一）